

富山県小矢部市

平成22年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報

2011年3月

小矢部市教育委員会

例　　言

1. 本書は、2010（平成22）年度に富山県小矢部市教育委員会が、国庫補助事業として実施した市内遺跡発掘調査等事業の概要報告書である。

2. 調査は、小矢部市教育委員会が実施した。ただし、埴生条里遺跡の調査は㈱アーキジオに委託した。担当は次のとおりである

　調査事務：中井真夕（文化スポーツ課主任）

　現地調査　中井真夕：本発掘調査＝石名田木舟遺跡、試掘調査＝宮須遺跡、蟹谷条里遺跡、
　　日の宮・道林寺遺跡、埴生条里遺跡（個人住宅）、桜町遺跡（桜町JOMONパーク整備）、平田・藤森遺跡、桜町遺跡（店舗建設）、金屋本江遺跡
　　上野　章（㈱アーキジオ埋蔵文化財事業部調査担当者）：埴生条里遺跡（土地区画整理）

※本発掘調査については、調査費用の農家負担分（11.5%）を国庫補助している。

3. 調査の参加者は次のとおりである。　現地測量・実測、整理作業等：田畠郁子

4. 現地調査の作業員は、㈱富山県シルバー人材センター連合会から派遣を受けた。

5. 本書の編集・執筆は中井が担当した。埴生条里遺跡については上野氏に執筆を依頼した。

6. 本発掘調査については、事業主負担で『富山県小矢部市　石名田木舟遺跡発掘調査報告書－ほ場整備（経営体育成基盤整備事業）地崎地区に伴う埋蔵文化財調査（2）－』を刊行している。

7. 土層の色調については『新版 標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編著、1967）に準じている。

8. 川土遺物及び記録資料は、小矢部市教育委員会が一括して保管している。

目　　次

事業の概要	1
市内遺跡発掘調査等事業一覧	3
市内遺跡発掘調査等事業位置図	4
宮須遺跡	5
日の宮・道林寺遺跡	6
埴生条里遺跡	7
報告書抄録	12

事 業 の 概 要

平成22年度の概要

2010（H22）年度に小矢部市内において実施した埋蔵文化財の発掘調査等は19件である。うち2件は本発掘調査で、このうち1件については調査費の一部を国庫補助で実施しているが、ほか1件は事業主負担で実施した。また、市内遺跡発掘調査等事業として国庫補助を受けて試掘調査を8件と分布調査を1件を行った。そのほか、工事立会を4件、慎重工事4件に対応した。開発行為の事前協議、民間・個人による小規模開発、農地転用・農業振興地域除外申請に伴う問い合わせ等が35件あまりあった。

調査の原因は開発行為別にみると、個人の住宅建設、携帯電話基地局設置、宅地造成、店舗建設、土地区画整理事業に伴うものや、公共事業に伴うものなどがある。公共事業では特に経営体育成基盤整備事業（ほ場整備）に伴う開発は開発面積が広大であり、今年度は本発掘調査・分布調査・工事立会を各地で行い、その概要について以下に個別で報告する。また、事業の原因者は、個人4件、民間事業所5件、公共団体10件である。

以下、調査種類別に各々の調査について概要を報告する。なお、試掘調査は本書で報告する。
本発掘調査（国庫補助事業分）

本発掘調査は、小矢部市の東端に所在する石名田木舟遺跡内で実施される農業基盤整備事業に伴うものである。調査面積は1,250m²、期間は7月28日から9月30日で実施した。調査の結果、15世紀後半～16世紀前半に帰属する井戸、溝、土坑、ピット、性格不明遺構の遺構を確認した。なかでも井戸は33基検出し、すべて石組で構築されていた。その水溜施設には、おもに底部を貫いた状態にした「丸太刺り貫き材」・「曲物」・「桶」・「木臼」・「木摺臼」が使用されている。また、検出した溝は調査区の南側で実施された能越自動車道建設に伴う発掘調査において検出された溝とつながる可能性が高く、この溝は方形に巡る武家屋敷の区画溝と報告されている。

分布調査

分布調査は、小矢部市のほぼ中央を北流する小矢部川の右岸側に位置する金屋本江地内で計画されている農業基盤整備事業に先立つもので、事業面積は99.8haと広大で金屋本江遺跡が含まれていた。そのため事業主体者と協議し、稲刈り後の田越し作業が終了する11月上旬から踏査を開始した。その結果、事業面積の約86パーセントにあたる範囲で古代～中世、近世、近代の遺物を採取した。この結果を基に金屋本江遺跡の埋蔵文化財包蔵地範囲を拡大するとともに、事業主体者に結果を報告し、田面の掘削を計画している範囲を試掘調査することとなった。

近年、新幹線敷設や今回のような農業関連などの大規模な開発が市内で行われ、調査の機会を得ている。特に埋蔵文化財包蔵地の範囲外であった場所での新規発見は、小矢部市の歴史に新たな情報を提供してくれる反面、開発行為者の工事計画の支障となりえるため、周知に努めなければならない。

工事立会

工事立会は、小矢部市の東側に広がる扇状地に立地する本領地崎遺跡内で行われる農業基盤整備事業の工事に伴い実施した。工事面積は約45,000m²あり、内容は主に田面掘削工事であった。当該遺跡は平成19年度に今回の工事計画を示され、分布調査にて発見した遺跡で、次年度に試掘調査を行い、広範囲で耕作土直下に遺構が分布することを確認した。この結果を受けて工事計画が見直され、全域で田面に保護盛土をすることになった。ただし事業主体者は耕作土の回収が必要であるため、今回はその回収作業に立会った。その結果、試掘調査の結果よりも高い標高で遺構が広がる部分が現れ、再度、工事計画の変更が行われた。

本領地崎遺跡は隣接する高岡市福岡町にも広がる遺跡で、その南側には木舟城跡を内包する石名田木舟遺跡が隣接する。本領地崎遺跡の本発掘調査は一度も実施されていないが、試掘調査や分布調査で得た結果より8世紀代と16世紀代の2時期が主体となる遺跡であることを確認している。両遺跡はJR北陸本線によってラインが引かれているが、推定されている規模や時期から深い繋がりを持つものと考えられる。



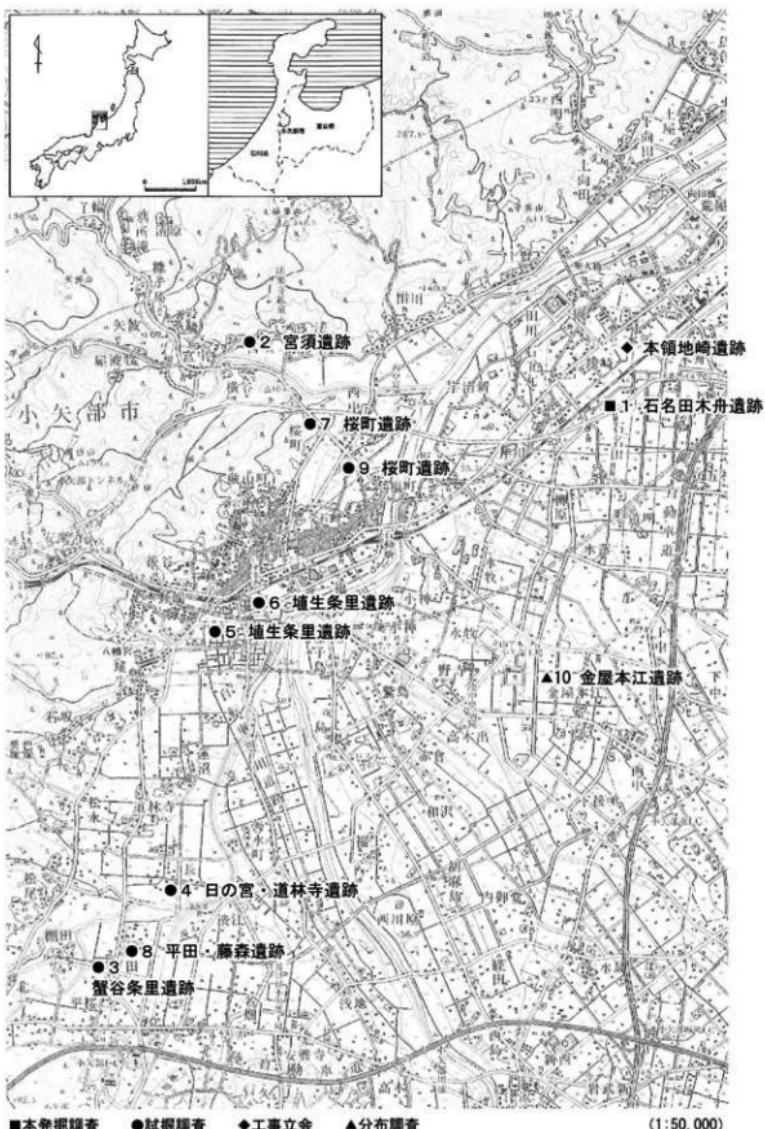
本領地崎遺跡（地崎地内に所在）、■部分に濃密に遺構が分布している。

0 200m
(1:5,000)

市内遺跡発掘調査等事業一覧

No.	遺跡名	所在地	調査対象面積 (掘削面積)	調査種別	現地調査等 期間	調査結果	調査原因
1	石名田木舟遺跡	地崎地内	1,250m ² (1,250m ²)	本調査	22.7.28 ～ 22.9.30	(古代)須恵器、土師器出土 (中世)井戸33基、溝2条、土坑11基、ピット85基、不明造構2カ所。中世土師器、珠洲、青磁、瀬戸美濃、蒼花、瓦質土器、錢貨、石製品、木製品、トイゴ羽口出土。	経営体育成基盤整備
2	宮須遺跡	宮須33番3外	142.5m ² (8m ²)	試掘調査	22.7.27	造構確認されず。須恵器、土師器出土。	市道拡張
3	蟹谷条里遺跡	地崎地内	195.06m ² (4m ²)	試掘調査	22.9.29	造構確認されず。遺物出土せず。	市道拡張
4	日の宮・道林寺遺跡	道林寺28番1外	413.28m ² (15m ²)	試掘調査	22.9.30	造構確認されず。須恵器、珠洲出土。	市道拡張
5	埴生条里遺跡	平塚6175-35	350.95m ² (5m ²)	試掘調査	22.10.1	造構確認されず。遺物出土せず。	個人住宅建設
6	埴生条里遺跡	石動町地内	40,000m ² (284.7m ²)	試掘調査	22.10.5 ～ 22.10.30	柱穴、溝。(時期不明) 須恵器、土師器、中世土師器、珠洲、近世陶器、木製品出土。	土地区画整理事業
7	桜町遺跡	桜町中山1691外	4671.37m ² (29m ²)	試掘調査	22.10.14 ～ 22.10.15	造構確認されず。遺物出土せず。	桜町JOMONパーク整備事業
8	平田・藤森遺跡	平田3102番外	5,503m ² (195m ²)	試掘調査	22.11.15 ～ 22.11.18	造構確認されず。遺物出土せず。	自動工場敷地造成事業
9	桜町遺跡	桜町池田540	201m ² (4m ²)	試掘調査	22.12.22	造構確認されず。遺物出土せず。	店舗建設
10	金屋本江遺跡	金屋本江地内	998,000m ²	分布調査	22.11.5 ～ 22.11.16	須恵器、土師器、珠洲、中世土師器、近世陶器採取。	経営体育成基盤整備

市内遺跡発掘調査等事業位置図



■本発掘調査

●試掘調査

◆工事立会

▲分布調査

(1:50,000)

宮須遺跡

図1 調査位置
(1:10,000)



調査の概要

宮須遺跡は市の北部に連なる宝達山丘陵の裾部に位置しており、標高は38mを測る。遺跡から南へ約100m下ると小矢部川の支流である子撫川が東へ流れている。遺跡は分布調査によって発見されたが、発掘調査を実施する機会は得られていおらず実態は不明である。今回の調査は市道拡張に伴うもので、限られた範囲であるが初めて発掘することとなった。調査地は遺跡範囲の南端に位置する。現状は畑地である。

現地調査は2010年(H22)年7月28日に実施した。調査対象地142.5m²に1m×4mを2ヵ所の試掘トレンチを設定した。重機械により掘削し、平面及び断面を人力により精査した。最終的な掘削深度は60cm前後となった。トレンチ1(=T1)では表土から約60cmで暗渠排水が現れたため、それ以上の掘削は行わなかった。層位は1層：暗褐色シルト(耕作土)、2層：褐色シルト、3層：褐色シルト(レキ混)、4層：レキ層である。トレンチ2(=T2)の層位は1層：暗褐色シルト(耕作土)、2層：黒褐色シルト、3層：黒褐色シルト(レキ混)、4層：黒褐色粘土である。2層は10~20cmの厚さの遺物包含層と考えられる。ここから古代後半頃の須恵器や土師器の破片が出土した。遺物包含層を掘り下げたが、遺構は確認できなかった。2本のトレンチから推測できることは、西側のT2から東側T1にかけて緩やかに地形が下がり、T2の遺物包含層の堆積は、T1には続いていないようである。

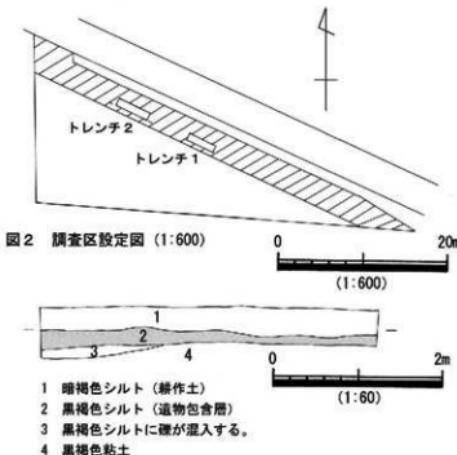


図2 調査区設定図 (1:600)

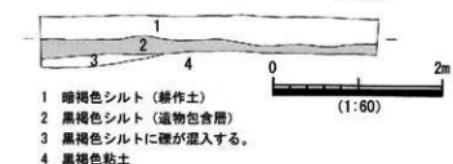


図3 トレンチ2南壁断面図 (1:60)



図4 出土遺物 (1/3)

日の宮・道林寺 遺跡



図5 調査位置
(1:10,000)

調査の概要

日の宮・道林寺遺跡は市街地の南西、渋江川左岸の段丘上に位置する。周辺一帯は市内で最も遺跡が集中する地域で、従来8つの遺跡名で呼称していたが、昭和57年度の遺跡詳細分布調査にて、広域をひとつの遺跡として名称を変更した。今回の調査は市道拡張に伴うもので、調査地は遺跡範囲の南端に位置する。現状は水田である。

現地調査は2010年(H22)年9月30日に実施した。調査対象地に1m×3mを5ヵ所の試掘トレンチを設定した。重機械により掘削し、平面及び断面を人力により精査した。最終的な掘削深度は80cm前後となった。調査範囲内が限られているので、市道と畦に跨いで重機械の足場を

設置し、水田には入らずに調査を行った。基本層位は1層：畦の盛土、2層：黄灰色シルト（水田耕作土）、3層：暗褐色粘土（水田基盤層）、4層：褐灰色粘土、5層：灰黄色砂礫ある。トレンチ1・2の4層から須恵器と珠洲の小片が出土し、遺物包含層の可能性があるため、5層上面で精査をかけたが、遺構の確認はできなかった。今回の調査地を含む周辺一帯は、昭和50年代の圃場整備によって土が大規模に移動している場所で、西側に分布している多くの遺跡の遺物が混入していることが十分に考えられる。

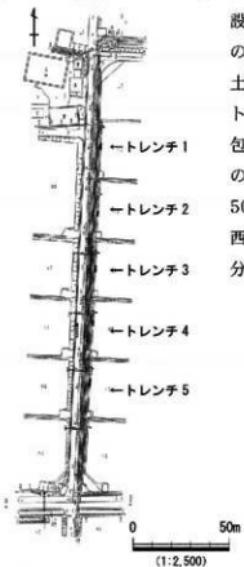


図6 調査区設定図 (1:2,500)

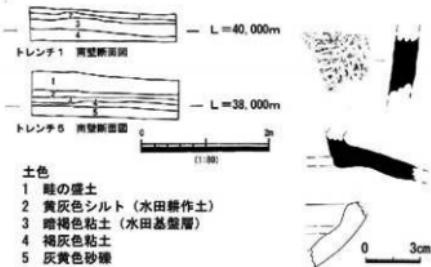


図7 トレンチ1, トレンチ5断面図 (1:80)

図8 出土遺物 (1/3)

埴生条里遺跡

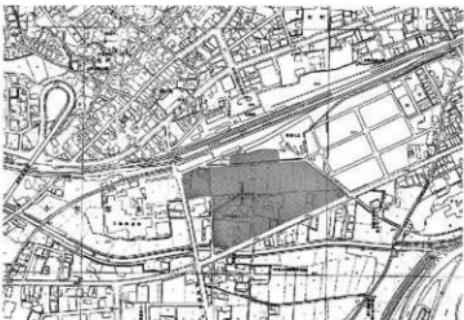


図9 調査位置図
(1:10,000)

1. 調査の経緯

小矢部市では、現在北陸新幹線の開業に伴うJR北陸線石動駅南周辺地区的市街化整備を目的に、平成21年10月に「石動駅南土地区画整備事業」組合が設立され、本格的に工事が推進されている。

この事業に先立ち、当該地域の埋蔵文化財である埴生条里遺跡の試掘調査を、平成20年度以前から計画検討されていた。調査は平成21年度～22年度にかけて駅南の踏み切りから綾子に通じる道路の主に東側を対象とし、遺跡内容の確認や遺存状況を把握するための試掘を実施した。

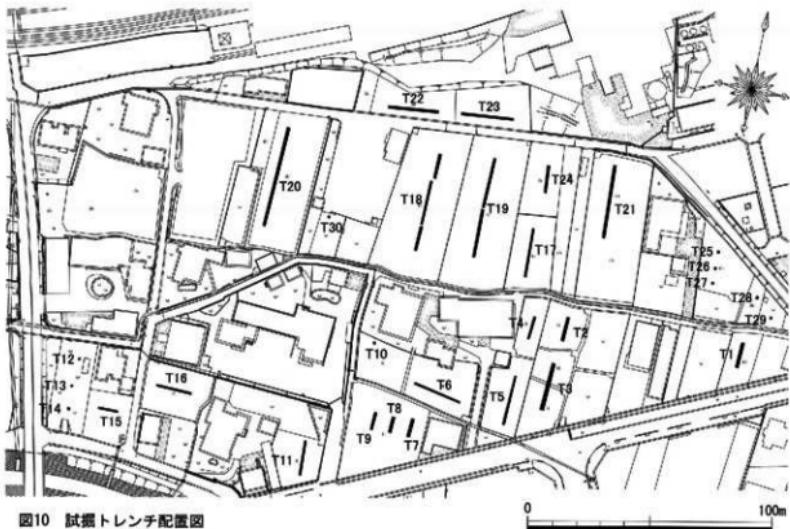


図10 試掘トレンチ配置図
(1:2,000)

2. 調査概要

今回の試掘対象面積は稜子・石動地内の約40,000m²で、埴生条里遺跡の北東地区に該当する。標高は30.2~31mで、高低差の少ない沖積地に立地する。当該地域には、『小矢部市史 上巻』(1971年発行)に記載されている条里などは見られず、その後の圃場整備で大きな区割りに変わっている。対象地の現在の地目は水田・畑である。

試掘調査は10月5日から11月1日まで、実働15日間である。その他に、事前準備の草刈り(市教委実施)、測量基準点の設置、現地で地権者との事前協議、仮設作業事務所設置及び発掘器材搬入などに数日を要した。

試掘調査は主に重機械を用いて幅1mの試掘溝21本を掘削し、更に手掘りにより、作付け中の畠地の空き地部分に、1×1mの試掘坑10ヶ所を設け、深さ約1mまで下げた。保水性の高い粘質土を主体とするため軟質であり、7・8・16トレンチでは試掘溝の側壁が著しく崩れる程であった。そのことから、遺物が出土せず構造が検出されない試掘溝については、下層確認の深さを0.8mに減じた。発掘総面積は284.7m²であった。

各試掘区の基本土層は類似したものであった。I層は黒褐色粘質土(約25cm)である。II層は灰色粘質土(約10cm)、III層は酸化鉄分が混入するにぶい黄褐色粘土である。IV層は酸化鉄の混入具合により2つに分層する場合もある。21トレンチでは地表面より0.8m下に褐灰色砂質粘土が約10cmの厚さで堆積する箇所が存在していた。6トレンチでは地表面より0.7~0.8mの深さに、ほぼ水平に厚さ0.1mの灰色砂質土や褐灰色砂質土が堆積していた。7トレンチは上層に厚さ0.5~0.7mの盛土が確認でき、その下層に旧表土が存在した。20トレンチでは北端から19mの地点で地表面より深さ0.5~0.7mにかけて、幅1.5mの流水による粗い粒の砂層が「U」字状に試掘溝を横切る土層が観察でき、この層からは古代の土師器片3点が出土した。

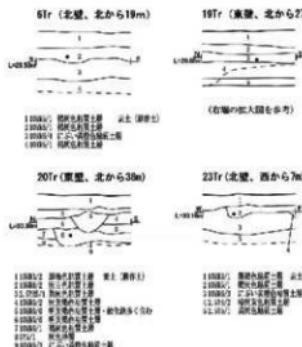
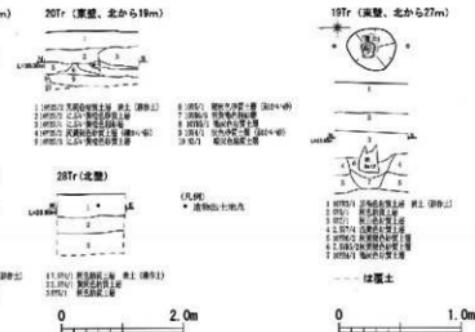


図11 主要トレンチ土層図(1:80)



3. 遺構（図10）

今回の調査では、19トレンチで柱穴、20・21トレンチでは、溝或いは自然流路を検出した。19トレンチで検出した柱穴は、掘方の平面形が楕円形である。規模は $0.4 \times 0.35\text{m}$ の大きさで、深さ 0.5m となり摺り鉢状の断面であった。掘方と柱との間には、 0.15m の間隔が見られた。時期は周辺からの遺物がなく不明である。

4. 出土遺物（図13）

19トレンチで表上から深さ 0.5m の灰色粘質土層から直径約 20cm の柱材1本が出土した。同じトレンチ内から他の柱穴や遺物の出土はなかった。周辺のトレンチからの遺物の出土は、17トレンチより土師器片2点が出土し、23トレンチからも土師器片2点を確認した。全体的に遺物量は少ないものであった。20トレンチからは古代の土師器片が地表面から深さ 0.7m 、横幅 1m 余りの砂層底面から出土した。遺物出土数は30点と少なく、時期は古墳時代・古代・中世・近世・近代の陶磁器である。古墳時代の土器は、1はが5世紀代の高杯杯部であり、脚部は遺存しない。高杯は小形化しており、杯部底近くで強く屈直して、平らな杯底を塞いだ半円球状の突出部が脚部側に残る。古代の土器は2~6である。2~4は21トレンチの北 21m の砂層出土で浅い溝跡内の土器と考えられる。2は赤褐色の内面に粘土紐の継ぎ目と頸部に指頭痕を残し、外面全体にも指頭痕が見られる製塙土器である。3・4は内外面にハケ目調整がなされ、4は外面に黒色の煤状炭化物が付着している。5は須恵器の杯Aの底部片で体部は細かなナデ調整がされている。9世紀後半の属しよう。6は内外面に回転痕がある須恵器の壺の体部片である。7は珠洲の壺片で体部に綾杉状の叩き痕を留める。8は土師器の壺口縁部であり、内面にハケ目がついている。9は鉄軸のかかった越中瀬戸の摺鉢口縁部である。10・11は近世陶磁器であり、10の椀は内面・外面に薄灰色の釉がかかり、高台と外底面側は生地のままである。11の椀は白の釉薬薄いコバルト色の文字かまたは文様がつけられている。12の柱は、木口面には工具痕が見られ平坦に調整されており、針葉樹の心材を用いる。

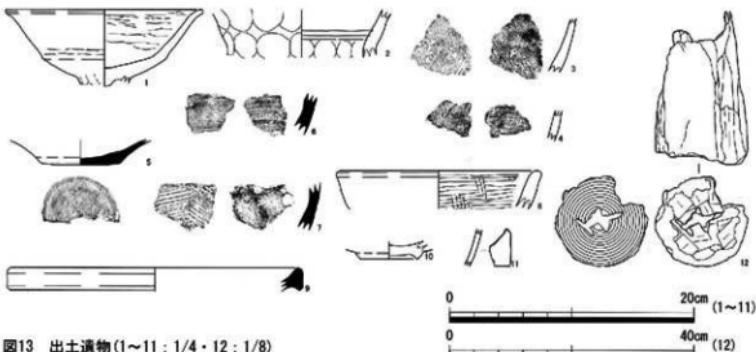


図13 出土遺物(1~11: 1/4・12: 1/8)

5. 増生条里について

荘園は古代から中世後期まで存在していた。奈良時代中期の天平15年（743）に豊田永年私財法が発布され、自分で開墾した土地の永年私財が認められた。中世に至ってから、富豪層は私領を開拓し、私領を守るために土地を貴族や大寺社権門に寄進した寄進地系荘園へと移行していった。また公領は受領や在地領主の私領となっていました。小矢部市の明治期の古い地割図に基づいて条里を検討した金田章裕氏の成果が『小矢部市史』（1971）に記載されている。それには「条里的なごり」として図示されている。同書による「条理のなごり」は小矢部川左岸の肥沃した土地の山麓沿いに存在していて、多くの荘園の存在が地割図から中世公領の支配領域として推定されている。小矢部市域では、荘園ではなく増生保（石清水八幡宮）・蟹谷保（内蔵寮）

の2箇所がある。増生条里（保）は小矢部川支流の砂川の両岸から小矢部川左岸に広がる遺跡であり、その地割図は先の『小矢部市史』や『北反戦遺跡調査報告書Ⅱ』に掲載されている（伊藤・塙田1990）。

今回の試掘対象地は高低差が1m前後と平坦で、土層の堆積は粘質土を基本とする。平成21年度に調査された西側地区（中井・上野2010）とは高低差や土質が砂質土であることなど、大きな違いが認められる。出土遺物量も古代・中世を中心に多く出土しており、ほ場整備以前であれば、遺跡の条里の痕跡が存在したかもしれないが、現在では条里や村落の存在は確認できない状態である。今年度の調査では、19トレンチで柱が残っていたが、他に関連する遺構は見られなかった。

ちなみに、過去の調査では、増生条里の中世の村落は、15世紀頃の掘立柱建物や多くの井戸跡がみつかった日の宮・蓮沼遺跡（第14図①）や、北反戦遺跡（第14図②）である。

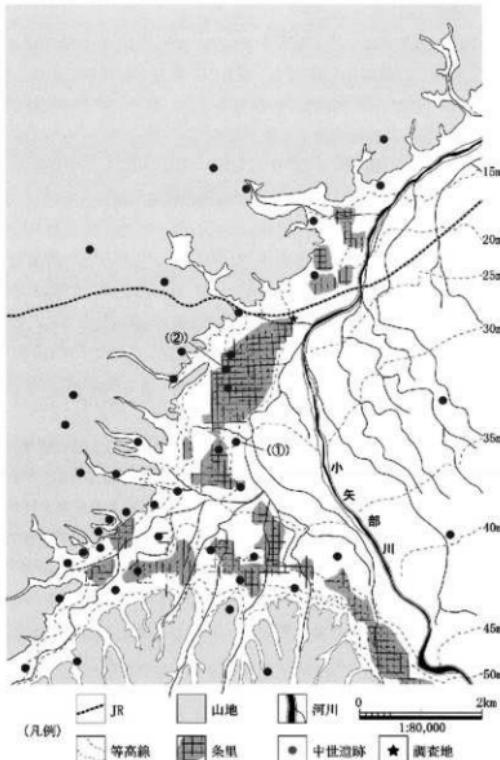


図14 小矢部市周辺の条里遺構（地図は明治43発行）

また、小矢部市五社遺跡では中世前期を中心とした「糸岡庄」の莊園の庄域が発掘されており、12世紀後半から13世紀に最盛期を迎えて15世紀に衰退した遺跡である。調査では、掘立柱建物48棟や溝・井戸など多数の遺構や遺物が検出されている。報告書の考察では掘立柱建物群の地区ごとの分布と配置から建物群を7グループに分けて、建物方向の主軸や規模の検討を行い、大規模建物が有力農民層の開発拠点としての居住地であり、時期が少し遅れた中・小規模建物が下級農民の居住地との考えを示している。集落全体では各建物群が数十メートルの間隔をあけグループごとに立地し村落の一形態を具体的に示した例としている。(山本1998)。

引用文献・参考文献

- | | | |
|-----------|------|--|
| 小矢部市史編纂室 | 1971 | 「古代のふるさと」『小矢部市史』小矢部市 |
| 小矢部市史編纂室 | 2002 | 『小矢部市史－小矢部風土記編』小矢部市 |
| 伊藤隆三・塙田一成 | 1990 | 『北反戦遺跡－条里遺構の発掘調査概要Ⅱ－』小矢部市教育委員会 |
| 中井真夕・上野章 | 2010 | 『平成21年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報』小矢部市教育委員会 |
| 山本正敏 | 1998 | 「五社遺跡中世村落の構造」『五社遺跡発掘報告』第1分冊
富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 |



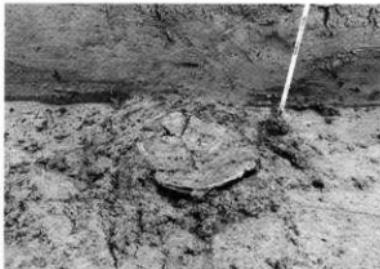
試掘調査状況



壁面土層記録作業



T19 柱根検出状況（図13-12）



T20 土師器出土状況（図13-1）

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうにねんどおやべしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう							
書名	平成22年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ名・番号	小矢部市埋蔵文化財調査報告書第71冊							
編著者名	中井真夕 上野 章							
編集機関	小矢部市教育委員会							
所在地	〒932-8611 富山県小矢部市本町1番1号							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 世界測地系	調査期間	調査対象 面積 (m ²)	調査原因	
宮須遺跡	小矢部市 宮須地内	16209	169	36° 41' 45" 世界測地系	136° 51' 53" 世界測地系	20100727	142.5	市道拡張
日の宮・ 道林寺遺跡	小矢部市 道林寺地内	16209	52	36° 38' 46"	136° 50' 58"	20100930	413.28	市道拡張
埴生条里 遺跡	小矢部市 埴生・ 石動地内	16209	185	36° 40' 16"	136° 51' 53"	20101005 20101101	40,000	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
宮須遺跡	散布地	古代か	なし	須恵器、土師器				
日の宮・道林寺遺跡	集落	古代	なし	須恵器、珠洲				
埴生条里遺跡	条里	古代～ 中世か	柱穴、溝 (時期不明)	須恵器、土師器、中世土師 器、珠洲、青磁、近世陶器、 木製品				

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第71冊

富山県小矢部市

平成22年度 小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報

発 行 日 平成23年3月31日

編集・発行 小矢部市教育委員会

〒932-8611 富山県小矢部市本町1-1

T E L 0766-67-1760

印 刷 トッププリント

